

# 睡虎地秦簡《語書》釈文注解(上)

高 橋 庸 一 郎

## 序 (一)

一九七五年に発掘された湖北省雲夢縣睡虎地の秦墓、或いはその時に出土した千余枚にのぼる竹簡全体については、已に「陝南論集」第二十三巻・第四号にその概略を記したのでここには触れない。いま扱おうとする『語書』についての若干述べておきたい。

『語書』は墓主(同墓から同時に発掘された『編年記』の昭王四十五年の条に、「十二月甲午雞鳴時、喜座」とある所の「喜」その人であろう)の腹の下あたり、即ち右腕の第二関節以下の骨があったその下から発見されたものである。この『語書』に当る竹簡は十四本から成っており、『語書』という標題は第十四簡の裏面上部に記されていた。一九七六年九月に睡虎地秦墓竹簡整理小組によって文物出版社から出版された精装大型本『睡虎地秦墓竹簡(一)』には、『語書』竹簡の原寸大カラー写真が綴じ込められており、それに依ると竹簡の長さは大体二十七・六センチか或いは二十七・七センチ

で、幅は五、或いは六ミリである。最上部、最下部、中間部の三カ所が紐のようなものでしばってつながれていたらしく、最上部は約一センチから一・五センチ、最下部は約一・五センチが文字の書かれていない空白となっており、中間部にも文字と文字の間が心持ち広くあいている部があるのは、それぞれがこの紐どめの部分に当るのである。一本の竹簡には、合文を一字と考えた場合、一ぱいに書いたとして三十七字から四十二字ぐらいが書かれている。この『語書』の場合は、前半八簡と後半六簡は篇が異っているらしく、前八簡は、一簡上の文字数は約四十二、後六簡の場合は一簡の文字の書き出しが前八簡の場合より一文字分下っている為に上部の空白一・五センチ分とってある外、全体の文字の配列にもゆとりがあり、この場合が一簡約三十七字前後となっているのである。

またこの『語書』には句点らしきものが打っており、前半部分ではそれを二十二カ所確認することが出来る。但し後半では確認できる句点らしきものは一カ所のみである。これは書写人が故意にそうしたものか、或いは土中に二千年余埋れている間に消失したものか

は明らかではない。こうした句点については、先秦の文献では『戦国楚帛書』に、この『語書』とは少しその形は異なるが、若干みとめられる。また漢代の出土文献であるが、『馬王堆帛書』群の中にもこうした句点に属するものではないかと疑われるものがいくつか存在する。しかしこの『語書』の前半部分に見える句点様のものは、他の『戦国帛書』『馬王堆帛書』の場合よりも句点としての役割りが非常にはっきりしているように見受けられる。これは上古書法を採る上でかなり重要な資料となるであろう。

## (二)

『語書』の書き出しは次のようである。

「廿年四月丙戌朔丁亥、南郡守騰謂縣、道嗇夫」(廿年四月丙戌の朔、丁亥の日に南郡の守騰は縣、道の嗇人に謂う)

南郡地区とはもと楚の国に属していた地区である。『史記・

秦本紀』の昭王二十八年(B・C二七九)には

「大良造白起攻楚、取鄢、鄢、赦罪人遷之」(大良造白起楚を攻め、鄢、鄢を取り、罪人を赦して之に遷す)

とあるように、秦昭王が白起に命じて楚を攻め、楚の地である鄢や鄢を取り、罪人をこうした地方へ移住させたのは二十八年のことであった。尤も同じ睡虎地秦簡の『編年記』では、

「廿七年、攻鄢」

とあって『史記』とは一年の差があるが、これは「攻む」と「取

る」の差が表われたものであろう。また白起がこの時楚から取った「鄢」は、この時まだ生れていなかった『編年記』の主人公喜が四十年後に「鄢令史」となったその地である。翌二十九年に、「秦本紀」は、

「大良造白起攻楚、取鄢爲南郡、楚王走、周君來、王與楚王會襄陵、白起爲武安君」(大良造白起楚を攻め、鄢を取りて南郡と爲す。楚王走り、周君來る。王楚王と襄陵に會す。白起武安君と爲る)

と記している。また「穰侯列傳」には、

「四歳、而使白起拔楚之鄢、秦置南郡、乃封白起爲武安君」(四歳にして、白起を使て楚の鄢を抜かしむ。秦南郡を置く、乃ち白起を封じて武安君と爲す)

とあり、また「白起王翦列傳」には、

「其明年、攻楚、拔鄢、燒夷陵、遂東至竟陵、楚王亡去鄢、東走徙陳、秦以鄢爲南郡、白起遷爲武安君」(其の明年、楚を攻め鄢を抜き、夷陵を燒き、遂に東は竟陵に至る。楚王亡げて鄢を去り、東のかた陳に徙る。秦鄢を以て南郡と爲す。白起遷りて武安君と爲る)

とある。即ち南郡というのは秦昭王二十九年に、白起の活躍によって得た楚の都鄢を中心とする地方に、はじめて置かれた秦の一地方行政区であった。それは長江中流、現在の武漢から江陵にまで亘る東西二百キロ南北七十キロの広大な雲夢澤を含む地域であった。白起が封ぜられたという武安は北方で、黄河の更に北側、邯鄲

の西約四十キロ付近である。白起が武安君となったというのは、自分の得た地に封ぜられたのではない。楚の都郢が秦の手に落ちたのは、この『語書』が発せられる約五十年前のことであった。『語書』は秦始皇二十年（BC二二七）四月初二日に南郡の郡守騰が、南郡の各県、道に頒布した一篇の通告文書である。前半部分の最後に

「以次傳、別書江陵布、以郵行」（以って次いで傳え、別に書して江陵に布<sup>ぢ</sup>むるに郵を以って行わしめん）

とあるがこの江陵とは楚の国の旧都郢のことである。当時は秦は南郡地方を統治してすでに半世紀にもなっていた。にもかかわらずこうした文書の頒布が必要であったのは何故か。これについて、一九七八年十一月に睡虎地秦墓竹簡整理小組によって出版された単行本『睡虎地秦墓竹簡』に収録されている『語書』に付された「説明」があり、

「这时、秦在南郡地方已统治了半个世纪、但当地的楚人势力还有很大影响、同时楚国也在力图夺回这一地区」（当時秦は南郡地方を統治してすでに半世紀たった。しかしその地方の楚の人の勢力はまだまだ大きな影響力を持っており、同時にまた楚の国では何とかこの地方を奪回しようともくろんでいた）

とその理由を説明している。そして更に続けて、

「《编年记》所记「南郡备警」一事、发生在文书的前一年。文书的内容、也反映了当时政治军事斗争的激烈和复杂、是一篇珍贵的史料」（『編年記』が記している「南郡警に備う」の一事は、この文書が発せられる一年前に発生したのである。この文書の内容

は当時の政治的軍事的闘争の激烈さと複雑さを反映しており、一篇の貴重な歴史資料である）

と結んでいる。確かに『編年記』には、始皇十九年に、

「□□□南郡備敬（警の通假字であろう）」（「南郡備え警す」か或いは「南郡警に備う」）

とある。そうすると『語書』の頒布は翌年であるからこの十九年にはそれ相応の外圧による緊張が南郡に迫っていたものと考えなければならぬ。しかし実際には『史記』を見る限り、そうした記述を何処にも見出すことは出来ない。ただ始皇二十六年に秦は初めて天下を統一するがその時の始皇の過去を振り返って言う言葉の中に

「荆王獻青陽以西、已而畔約、擊我南郡、故發兵誅、得其王、遂定其荆地」（荆王青陽以西を獻ず、已にして約に畔し、我が南郡を撃つ、故に兵を發して誅し、其の王を得、遂に其の荆地を定む）

とある。しかし「楚世家」にはこの事実関係について触れる所がなく、ただ「六國年表」の始皇二十四年、楚王負芻五年の条に、「秦虜王負芻、秦滅楚」（秦王負芻を虜にす、秦楚を滅ぼす）とあり「楚世家」には、「秦將王翳、蒙武遂破楚國、虜楚王負芻、滅楚名爲（楚）郡云」（秦の將王翳、蒙武遂に楚國を破り、楚王負芻を虜にし、楚を滅ぼして名づけて楚郡と爲して云う）とするのみである。そしてこの楚が「擊我南郡、故發兵誅」したのは始皇二十四年のことであって、この『語書』の発せられた年より四年後である。即ちこの年の四年以前から楚が已に「南郡」を撃つような動きがあったということも考えられようが、恐らく当時の楚にはそうした力

はすでもうなかったであろう。「楚世家」の幽王十年、即ち秦始皇十九年の条には、「十年、幽王卒、同母弟猶代立、是爲哀王、哀王立二月餘、哀王庶兄負芻之徒襲殺哀王而立負芻爲王」(十年、幽王卒す。同母弟猶代りて立つ、是れ哀王爲り。哀王立ちて二月餘、哀王の庶兄負芻の徒哀王を襲殺して負芻を立てて王と爲す)とあって内紛のみにあぐれており、楚の国力は地に落ちていたと言っても過言ではないからである。『語書』の発せられた翌年のことであるが『六國年表』の楚王負芻二年、即ち秦始皇二十一年の条には、「秦大破我、取十城」(秦大いに我を破り、十城を取る)とあり、楚は殆んどほろびかけている。故に始皇の言う「己而畔約、擊我南郡」とは恐らく楚に対する「發兵」の口実にすぎず、始皇の天下統一の野望実現の爲の自己正当化の言に過ぎないであろう。すると『編年記』の「今十九年、□□□□南郡備敬(警)」にいう警に備う相手は、楚の軍ではなくて南郡内部の秦始皇の掲げる所謂法治に服さない人々であろう。この『語書』が二十年に発せられたことと自身が実はこうした南郡内部の秦の法的政治になじまない人々の存在を証明するものであり、且つまた十九年の一年後にこうした文書を発するということは寧ろ楚などを主とする外敵が南郡に進攻して来るというような危険は全く迫っていなかったということを証明するものであろう。何故ならば、『語書』には軍事、外交、対外政策的な記述は全く含まれておらず、ただただ法治のみが論じられているからである。当時の楚国や楚人の希望としては南郡の奪回は悲願にも近いものであったに相違ない、しかし楚にはもはやそうした

行動に出る力はなかった。かくして今すでに楚が亡びんとするこの時に、南郡の守備がわざわざこの『語書』を発しなければならなかった理由は実はもっと根深い所にあったのではなからうか。つまりそれは対楚の爲ではなく、旧領楚人の持つ、反法治觀念、或いは非法治意識と言ったものに対して発せられたものであったと考えられる。

### (三)

『語書』前半部は法についての啓蒙発揚の文であり、法とは何なるものであるかを述べたものである。即ち

「凡法律令者、以教道(導)民、去其淫避(僻)、除其惡俗、而使之之於爲善殿(也)」(凡そ法律令なる者は、以って民を教え導びき、其の淫僻を去り、其の惡俗を除きて、之をして善を爲すに之かしめるものなり)

がそれである。しかしここに言う「淫僻」「惡俗」は積極的な政治的不満分子や、積極的な惡徳不服従分子を指している訳ではないようである。何故なら前文に、

「古者、民各有郷俗、其所利及好惡不同、或不便於民、害於邦」(古えは、民各々郷俗有り、其の利する所、好惡同じからず。或るものは民に便せず、邦に害す)

とあるからである。「郷俗」とはそれぞれの地方風俗のことである。即ち「淫僻」や「惡俗」というのは郷俗の一部であり、その利

する所や好惡の異なるもののあらわれであり、そのうちの特に民に便せず、邦に害を与えるもののことであるということになる。つまりこの文には北方から全く郷俗の異なる南郡へやってきて為政の官についた騰が、南郡の古くからの郷俗は認めながらも、その郷俗のうちで「不便於民、害於邦」ものと、そうでないものとを区別する為にここに法律令を布したのであるという口吻が読みとれる。また「令吏明布、令吏民皆明智(知)、毋巨(距)於罪」(吏をして明かに布せしめ、吏民をして皆明かに知らしめ、罪に巨ること母らしめん)ともあるし

「聞吏民犯法爲聞私者不止、私好、郷俗之心不變、自從令、丞以下智(知)而弗舉論、是即明避主之明法殿(也)、而養匿邪避(僻)之民」(吏民法を犯して聞私を爲す者止まず、私かに郷俗を好む心變らずを聞く。令丞より以下知りて擧げ論じ弗るは、是れ即ち主の明法に避むくなり、而して邪僻の民を養い匿すなり)ともある。これ等を読むと法を犯す者は一般の民のみならず下級役人もその中に入っているようである。普通一般には、下級役人は権力を笠に着て、人民に対して冷酷な収奪を行うことが知られているがここでは些か異っているようである。

吏民ともに郷俗の心を変えないということはつまり吏は中央から派遣されてくる為政の高官ではなく、現地調達郷土人を使っているということであろう。彼等は他の民と同様に長年にわたり郷土の風俗に慣れ親んで来たのである。そうして培われた習慣はそう簡単

に改まるものではない。その点が当地南郡をあずかる守騰にとってには歯痒い思いが募ったのであろう。故にここには前にも記した如く積極的な反政府的な動行に対する対処としての法を説いているのではないように思われる。つまりこの文書は

「故騰爲是而脩法律令、田令及爲聞私方而下之」(故に騰は是れが爲に法律令、田令及び聞私の爲の方を脩して之に下し、)

とあるように、「法律令」は一般人民、例えば商人、工人、運送業にたずさわる人、或いは下級役を対象とした法であり、「田令」とは農民を対象とした農政上必要な法である。それは丁度同じくこの睡虎地秦墓から出土した竹簡の中の「秦律十八種」などが、その具体的な法そのものに当るであろう。例えば「秦律十八種」のうち「田律」「廩苑律」「倉律」は「田令」に当り、「金布律」以下が「法律令」に当るのではなからうか。そうするとこの文書は「秦律十八種」を念頭に置いてその序文のような形で発せられたものかもしれない。勿論「十八種」は先に出版されてはいたがなかなか守れない為に改めて「語書」を発して法遵守の肝要さを説いたという可能性も考えられよう。

#### (四)

先にも述べた如く「語書」は前半部と後半部では各竹簡の文字の数のとり方が異り、編纂の意図、時期、使用目的なども双方異っていたものであろう。前半部は明らかに法についての啓蒙であったの

に対し、後半部は悪吏を告発することをすすめる文である。

後半部の主旨は先づ

「凡良吏明法律令、事無不能毆（也）」（凡そ良吏は法律令に明るく、事なす能はざる無きなり）

と述べて良吏の定義をし、その業務の公正さを謂い、次に悪吏について、

「悪吏不明法律令、不智（知）事、不廉絜（潔）、母（無）以佐上、繡（儉）隨（惰）、疾事、易口舌、不羞辱、輕惡言而易病人、母（無）公端之心、而有冒抵（抵）之治、是以善斥（訴）事、喜爭書」（悪吏は法律令に明かならず、事を知らず、廉潔ならず、以って上を佐ける無し。儉かに事を情疾す。口舌に易く、羞辱せず。軽く悪言して人を病し易し。公正の心無く、冒抵の治有り、是れを以って善く事を訴え、書を争うを喜ぶ）

といい、この後更に悪吏の醜態を細く記している。この文では良吏について述べた部分は少ししかなく、文の大部分のスペースが悪吏の説明に費やされているのは、前半部で郷俗について、郷俗の善い所については殆んど触れられていないのに対し、郷俗の悪の面としての法を犯す者について大部分のスペースが割かれているのと同じ通している。それは翻って前半部分で騰は郷俗の善の部分も認めているがそれは文面に表現されていないだけであるということが言えるであろう。

扱、『語書』は両文とも非常に抽象的で解りにくい。それは法の下での実例、法文、或いは悪吏にしても実際の例が全く挙げられて

いないからである。よってこの『語書』はもともとそうした実際の法文に対する付属の文、或いは前文として起草されたものに違いない。いづれの場合でもその具体的な法文は、この秦墓から同時に発掘された『秦律十八種』以下の多くの法律文であろう。そしてそれ等の法律文は恐らく非常に長い期間をかけて作られたものである。なぜならそれらは実に慎重に周到に作られたものであらうことが文面から理解出来からである。

秦は昭王二十九年に南郡を手に入れて以来、法になじんだことのない楚人達に徐々に法を理解させて来たのであらう。しかし結局は郷俗の方が勝って吏民ともに法にはあまりしたがわなかった。そこで郷俗の悪を説き、悪吏を監督する為に発したのがこの文書なのであらう。そこには北方の人間関係を重視する文化と、南方の対神關係を重視する巫系の文化との相違が大きく横たわっていることが感じられる。

## (五)

『語書』はこの文書を発したのが南郡守騰という人物であったところから最初は『南郡守騰文書』と呼ばれていたが、後に第十四簡裏面に書かれた題にしたがって『語書』と改めて呼ばれるようになった。最後に『語書』についての中国から出版された釈文を紹介しておく

『雲夢秦簡釈文(一)』雲夢秦墓竹簡整理小組

## 《文物》一九七六年第六期

これは(一)であるが、《文物》同年の第七期、第八期にそれぞれ(二)(三)がある。(一)に収録されているのは『南郡守騰文書』『大事記』(後に『編年記』と改称される)『爲吏之道』である。これ等の釈文はすべて簡体字で書かれているが、通假字或いは古体字はカッコで注出されており、原文の方に錯字がある時にはそれもカッコを用いて注出され、その他缺字、补字、衍字なども解しやすくように工夫されているが、釈文、解釈上の注は全くない。

『睡虎地秦墓竹簡』睡虎地秦墓竹簡整理小組・文物出版社一九七八年、これは全百二十一頁の単行本であり、中には、『編年記』『語書』『秦律十八種』『效律』『秦律雜抄』『法律答問』『封診式』『爲吏之道』釈文されている。これ等のうちで『語書』は「説明」「釈文」「注釈」「訳文」の四つの部分から成っている。この注釈は可成り詳しく参考になる点が多い。

『睡虎地秦墓竹簡』(七巻線装本帙入り)睡虎地秦墓竹簡整理小組一九七六年九月の「出版説明」があり出版は文物出版社である。これには『編年記』『南郡守騰文書』『秦律十八種』『效律』『秦律雜抄』『法律答問』『治獄程式』『爲吏之道』がとられており、それぞれ釈文、注解が施されている外、それぞれすべての写真図版が掲載されている点がこの線装本の秀れている点である。ただここにとられている釈文、注釈は『単行本』とほとんど同じである。恐らく『単行本』は、この帙入り線装本を普

及本として簡素化したものであろう。

『睡虎地秦墓竹簡』睡虎地秦墓竹簡整理小組(責任編集 吳鐵梅)一九八八年五月の「後記」を持つが、印刷は一九九〇年九月である。内容は『編年記』『語書』『秦律十八種』『效律』『秦律雜抄』『法律答問』『封診式』(旧題『治獄程式』)『爲吏之道』『日書』甲種、『日書』乙種で、それぞれ図版、釈文、注釋を持つ、前四種には『日書』の図版は勿論、釈文もつけられることはなかったが、この版になって始めて『日書』の図版が非常にはっきりとした写真となって掲載されたことが大きな特徴である。

(以下本文の釈文注解は次号)

(一九九一年七月十日受理)